

# 国木田独歩と民友社

——政治の問題——

辻 橋 三 郎

「欺かざるの記」の、一八九六年（明治二九年）一二月三十一日の項に、次のような表現がある。

「一番町教会を中心となす宗教。民友社を中心となす政治。家と野とにおける文学。此の三者は三十年のわが事なるべし。されど吾が天職は詩人なるべし。」

すなわち、民友社は、独歩にとって、彼の政治的識見を披瀝、実現すべき場所として規定されている発言とみてよからう。さらに当時の独歩にとって、政治が、三大関心事の一つであったということをも、推測させる個所でもある。

独歩における政治については、すでに、前田重氏と、猪野謙二氏とのすげられた論文がある。前者は、「明治の政治青年——独歩の天皇制批判など——」（『展望』昭和三年二月）であり、後者は、「独歩における『政治』——吉田松陰から星亨へ——」（『明治の作家』岩波書店、昭和四一年）である。前田文は、独歩が、藩、官学、郷の諸閥に不遇であったという世俗的条件によって、野心功名にまみれないその政治的情熱と抱負とを、發揮実現できなかつたということ、そのことも薩長政権への反感醸成の一要素になったのではないかとということ、星亨への傾倒は、星の敦奇なる生い立ち、その情熱、その志向に同質同類を感じたからではないかということ、さらに、山口県麻郷から水谷真熊宛書簡（明治二四年二月二十九日付）<sup>(1)</sup>にお

る、国家と現実とへの鋭い透察と批判の精神——卓抜な民主主義的姿勢——の指摘など、示唆と発見とにみち溢れたものである。猪野文は、独歩における吉田松陰への傾倒心酔という意識の構造分析が、その相当量をしめた論文である。本質的政策的であった松陰の「民主」「愛民」思想が、ワーズワースの思想を経由することで「山林海浜の小民」への愛に純化され、その「至誠」が、カーライルから学んだ「シンセリティー」に転化発展したとされたのは、誠に卓見といわれよう。そして、その松陰に、独歩は、明治維新本来の革命的理想の象徴をみるとともに、藩閥批判の最大の拠点をも見出していたといわれるのである。星への異常な関心については、前田説を、一層深めて、近似した生い立ちへの共感から、さらに、独歩は、星によって、その政治的欲求の実現と、運命論的な人間生死の問題についての疑惑解明という、根本的解決を夢みていたのではないかと述べておられるのも、十分に納得できる御見解である。

要するに、独歩の反藩閥意識の源流、星接近の原因について、両氏の説で、ほぼ尽くされているといっても過言ではないと思う。しかし、独歩の一面にあるナシヨナリスティックな意識、あるいは、例えば猪野論文が冒頭に掲げている、伊藤博文容認の姿勢、すなわち、藩閥肯定の因子、あるいは、政治の包含する悪に楽天的な傾向の淵源、あるいは、その形成過程については、余り言及されていないようである。

この問題の解明のために、前記した独歩のいう「民友社を中心となす政治」を調査尋求することは、いささか照明を当て得ることになるのではなからうかと思う。その点に焦点をすえつつ、独歩と民友社との関係を考えてみたい。

## 二、

「民友社を中心となす政治」とは、民友社をみずからの政治の場とする決意と読みとることができるが、この決意は、過去、民友社における政治的体験がなくては生まれ得ないものである。そこで先ず、その体験と思われるものをさぐることにあらはじめたい。

独歩が民友社入社を熱願したことは、日記（「欺かざるの記」を含む）書簡の、繰返し示すところであるが、正式に入社したのは、「欺かざるの記」によると、一八九四年（明治二十七年）九月一七日、退社は、一八九七年（明治三十年）三月頃と推定される。独歩が、民友社員として果した業績として大書し得るものは、日戦戦争従軍記たる「愛弟通信」を『国民新聞』に連載したことと、『国民之友』十二冊を、編集責任者として編集したこととである。このうち、『国民之友』編集の実態究明が、筆者の問題解明に資するところが大きいのではないかと考えられる。

独歩が編集名義人となったのは、一八九五年（明治二十八年）四月二三日号（二一九号）からである。その事務引継を受けたのは、四月一三日である。<sup>(3)</sup>前任者中村修一が、彼の編集にかかると一八九四年（明治二十七年）七月一三日号（二二三号）が、内閣総理大臣伊藤博文の職務を侮辱した記事を掲載したとして、官吏侮辱罪に問われて、四月九日、重禁錮二カ月、罰金一、〇〇〇円の判決が下った<sup>(4)</sup>ので、編集人の地位を譲ったのであった。独歩が、民友社創立以来の社員、中村修一の後をうけて、その地位についたといふことは、入社以来八カ月弱の彼の場合、やはり、抜擢と考えていいのではないかと思う。独歩は、中村とは「青年文学」<sup>(5)</sup>以来、昵懇であったことから、中村の推薦もあつたことと推測はされるが、それとても社長兼主筆たる徳富蘇峰からの信頼があつた<sup>(6)</sup>はこそそのことであつた。その信頼は「受弟通信」によつて促進されたものであり、それへの論功行賞の意味もあつたと思われる。さて、独歩が編集名義人として記されているのは、一八九五年（明治二十八年）一〇月一二日号（二六五号）までである。しかし、同年九月一二日午前六時半、塩原に出发して以来、事実上、編集不能に陥っていた筈である。ところが、「欺かざるの記」のいくつかの記事を総合判断すると、編集は、発行日より五日前から開始しているようなので、九月一三日号（二六二号）を、まがりなりにも、大体編集し終つて塩原行を計画、決行したと推定されるので、九月一三日号まで、彼の編集になると考えていいのではないかと思う。

独歩が、編集者として卓抜な才能力柄の持主であつたことは、民声新報社時代の同僚、近時画報社時代の矢野龍溪ならび

に同僚、独歩社時代の社員たちが、その回顧談で、ひとしく、口を揃えて証明しているところである。<sup>(6)</sup>したがって、彼の才幹を、炯眼な蘇峰が見落す筈はなく、中村の後任としての独歩の就任は、彼の事務的才能に対しても蘇峰が信頼をおいていたとみて、ほぼまちがいあるまいと思う。さて、独歩が、編集人としての記事執筆の有無についてだが、民声新報社の同僚原田秋浦は、次のようにいつている。

「尚ほ、書くことに就て言へば、氏はこの頃紙上に於て殆んど書いたことがなかった。(中略)尤も、編輯長といふ多忙な位置が一ツは筆を執り得ぬ原因でもあつたらうが、好し執り得たとするも、迅速達意を尙ぶ新聞の記事としては、寧ろ氏の筆は適して居ない、此の筆は余りに高尚過ぎる、余りに勿体ない、要するに新聞社に於ける氏の位置は矢張り何処までも編輯長といふのが最も当を得て居たのである。」<sup>(7)</sup>

すなわち、多忙のためと、文学的すぎる文章とが新聞向きでなかつたので、編集長としての執筆はなかつたといふのである。しかし、それは、新聞の場合であり、雑誌の編集長としてもそうであつたとは判定できない。というのは、「欺かざるの記」一八九五年(明治二十八年)六月一九日の項に、

「社務多忙なり。(国民之友編輯)。文章を草すること少なからず」と記されているからである。『国民之友』編集長時代『家庭雜誌』『国民之友』に執筆した文章は、それとして、はつきり、「欺かざるの記」中、特記されているのだが、それ以外の文章にも、独歩筆があるといふことをこの記事は物語っているのである。それならば、『国民之友』中の無署名の文章といふことになるのだが、どの項目の文章をさすのか、考察の必要が生ずるのである。『国民之友』の巻頭論文たる「国民之友」欄は、本来なら、主筆たる蘇峰が、民友社の主義主張を発表する場所で、事実、大部分は、蘇峰の執筆にかかると思われるが、そうでないことも——他の記者たちの執筆によるものもあることが、既に家永三郎氏によって指摘されているところである。<sup>(8)</sup>であるからといって、独歩の文章が、『国民之友』欄にもあるということにならない。主義主張を世に訴える

ような論文を書いた場合、独歩ならば、前記したように、必ず、その旨を、「欺かざるの記」中に記しているに違いないからである。そうであるとすれば、『国民之友』の、「国民之友」欄以外の、他の無署名の文のどれかでなくてはならない。すなわち、「評論」、「海外思潮」、「時事」、「海外記事」、「経済事情」、「時事日記」、「一語千金」の、何れかということになるのである。しかし、このうち、「時事」欄以外は、内外の新聞雑誌の論文や記事の紹介と、それへの短い批評であり、とりたてて、編集陣の見識のうかがわれるものではない。「一語千金」は、古今東西の名言金言を列挙したもので、たしかに、この中には、独歩の選択したものがあつたのだが、独歩のそれとして、個性の体臭を漂わせたものとはいえない。そこで残る「時事」欄だけが、問題になるのである。その「時事」欄は、先ず、「国民之友」「特別寄書」「藻塩草」欄と同じく、六号活字で組まれていることが注目される。次に、その内容は、事項の性質によつては、より掘り下げられた詳密さをもち、それが筆者の主張と批判とに裏づけられているのである。したがつて、これらの無署名の記事群こそ、編集長以下の編集者たちの筆になるものと考えられる。そして、先述した、独歩のいう「少なからざる」文章とはこれらの幾つかをさすのではないかと思うのである。したがつて、この「時事」欄こそ、無署名ながら、編集長にとつては、みずからの抱負見識を表明できる場所として、読者からは、主筆以外の編集人の姿勢を読みとり得る唯一の場所として、考えられていたのではないかと思われる。であればこそ、巻頭論文「国民之友」欄同様、種々多様な傍点が、惜しみなく使用されてもいたのであつた。

そう判断し得る有力な根拠として、特に独歩編集長の執筆と確認できる、次のような事実をあげることができる。すなわち、この「時事」欄の項目は、独歩編集の一二冊を平均してみると、一冊、約一八項になるのである。それが、佐々城信子事件が紛糾した時の九月三〇日号（二二六号）は、僅かに九項しか記されていないのだ。ということは、「時事」欄の編成が、いかに編集長の掌中に握られていたかということ、明白に物語つていえるといえようかと思う。但し、その内容につい

ては、社長兼主筆たる蘇峰の意志と期待とに、大きく叛くことは許容されなかったであろうことは、想像に難くない。そのような推測仮定の上に立って、この時事欄を通観してみたいと思うのである。

三、

独歩編集一二冊の「時事」欄の項目を総計してみると、二一五項になる(目次と内容とは異同がある)。これを記事内容から分類してみると次のようになるのである。

外国関係	(外交、外国事情、植民政策などをふくむ)	一三四
宗教問題		四
社会問題		四
軍事問題		一〇
国内事情		四
皇室関係		二
内政問題		三二
雑		一〇
抹殺		一

外国関係が群を抜いて多いことは、『国民之友』本来の編集方針の軌道にそったものであり、ナシヨナルな問題に関する、民友社の強大な関心を示して余さない。そして、その幾つかが、独歩の筆になったものであるに違いないことが、確認されるのだ。というのは、『国民之友』独歩編集時の「欺かざるの記」における、一八九五年(明治二八年)四月二十九日、五月一二日、五月一四日、七月一三日の項に、ナシヨナルな問題への一行乃至数行の言及があるのである。しかも、それが、

『国民の友』『時事』欄と照応していることを指摘できるのである。例えば、五月二二日の、

「占領地盛原省の部分を支那に返す事に決したるもの如し。蓋し魯国以外の干渉の結果なり。付ては今度出すべしとの噂ある占領地返却に関する詔勅に於ては十分事実を明記して露国等干渉の結果遂に此の大屈辱を被るに至りし事を全国民に宣言するを急務とす。その意見を起しぬ。」

とあるのが、一八九五年（明治二八年）六月五日号（二五二号）の「時事」欄の「前後の詔勅」と符合するものといえるのである。そして、そこには、愛国者独歩の面影が十分に發揮されてもいるのである。次に、内政問題が多いことは、「予は本来政治が好きであり、政治が予の生命であった」という蘇峰の意志に副ったものであった。藩閥政権については、蘇峰は、日清開戦まで、その攻撃の対象にしていたが、開戦後、全面的な抵抗は棄てた。その上、派閥闘争にまでまきこまれていたのであった。したがって、自由党批判、伊藤博文攻撃の少なくない「時事」欄の記事もまた、蘇峰路線上のものなのである。さらに、松方正義に対しては特に寛大であった点も、蘇峰の政治姿勢に傾斜したものであったといえようかと思ふ。それらは、蘇峰の期待に十分に答えるものがあつたにちがいない。

ところが、日清戦後の軍備拡張に関しては、「新税法に関する三方法」（明治二八年四月一三日号、二五〇号）において、「地租増加の如きは経綸ある政治家の為すべきものにあらざる也」

と断言しているのである。これについての蘇峰の意見は、「地租増税」であつたのであり、<sup>(11)</sup>「時事」欄の発言は、蘇峰の意志意見に、真正面から対立したものであつた。こうした見解が出たのも、「現今農民の惨状」（明治二八年六月一三四号、二五三号）「興業銀行と農民の没落」（明治二八年八月二三号、二六〇号）のような農民の窮状への認識という、社会科学的理解に基づいていたものと思われる。また、「北米に於ける日本人の狀態」（明治二八年六月二三号、二五四号）とか、「寡婦孤兒劍光旗影の下に泣く」（明治二八年八月二三号、二六〇号）とかは、異国における同朋の売春婦、戦争未亡人、戦争孤兒への万斛の同情を注いだ

ものであった。以上の内政問題その他については、独歩筆という手がかりは、「欺かざるの記」の中から見出すことはできない。むしろ、「現今農民の惨状」「北米に於ける日本人の状態」などは、統計を基礎にして記述してある点、類似の形式が、独歩筆として確認されるものが皆無なことから、独歩文ではないことが推定されるのである。しかし、ここに、編集長独歩の賛意、諒承のあとを見出すことは、過剰解釈にはならないと思う。というのは、それらは独歩の基本的思想の一つとして小民愛に対応するものということができるからである。独歩編集の『国民之友』一二冊の前後五冊——独歩編集ではない——には、以上のような社会的発言のないことも、このことを裏書するものといえるのではないかと思う。そして、それが、編集長独歩以下の編集陣の、彼らなりの平民主義の理解主張であったともいえよう。また、それは、彼らなりの、社長兼主筆蘇峰への自己主張でもあったともいえよう。

宗教問題については、「神官僧侶の無学」(明治二八年六月一三日号、二五三号)、「神官を平人より出す新制」(明治二八年八月二三日号、二六〇号)において、神官僧侶の無教養を指弾、国家神道への懷疑を述べ、「血に渴したる従軍僧侶」(明治二八年七月一三日号、二五六号)では、仏教の宗教性喪失を痛嘆している。これらは、すべて、キリスト教的視点を予想させるものであり、したがって、民友社員すべてのものであったにはちがいない。しかし、この宗教問題への関心も、独歩編集『国民之友』一二冊の、前後五冊の「時事」欄には見出すことのできない問題意識である点、やはり、編集長独歩の息吹を感じることができるのである。

以上要するに、独歩編集の『国民之友』「時事」欄は、多様な問題意識に、時には蘇峰の見解に背反しつつも、大枠においては、蘇峰の意志期待に副うという一線を遵守したものであった。すなわち、蘇峰にとつての最大の関心事である外国問題に、多大の関心をよせ、対外策に露頭をみせている藩閥路線への協調という蘇峰の転向に、好意ある同調の姿勢を示しているのである。されば蘇峰にとつては、不足不満はなく、叱責注意のありようがないと予想されるのに、「欺かざるの記」



には、蘇峰対独歩の異常な緊張関係が幾度も記されているのである。

四、

「徳富猪一郎氏吾に非常の侮辱を加へたること、由て退社せんと決心し父母の同意を得たるが故に時機を待ちつつある事。（中略）失望は人吾れ果して為すあるのか、Vの自問自疑より来り、希望は人神いますVの信仰より来る。」（明治二八年六月一〇日）

「雇はるる者は如何なる口実と体裁とを以てするも多少の奴隷たるを免ぬがれず。寧ろ自然と戦ふ可し。労苦を撰んで自由を取るべきなり。」（明治二八年六月二五日）

「徳富をして其の傲慢を吾が前にふるはしめよ。」（明治二八年七月二九日）  
これらは、蘇峰に対する反応のあとであるが、これまでとても、そのあととても、「欺かざるの記」中には、蘇峰とのこのような軋轢を示した記事はほとんどないといつてよい。（明治二九年八月一四日の項に、「徳富猪一郎何者ぞ」という記事があるだけ）。

「欺かざるの記」は、さらに、もう一つ、特異な記事を展開しているのである。それは、約七カ月という短期間の、『国民之友』編集人時代の記録に、神への祈禱の形式が、六カ所もあることである。四年八カ月にわたる、「欺かざるの記」の全期間を通じて、祈りの形式は、総計二一箇所あるのであるが、これは、その約三分の一弱に当るといふことができる。その祈りの表現には、キリスト教信徒としての常套的なものも少なくなく、独歩の熱心な教会生活を偲ばせるものがあるが、その間隙を縫って、独歩個人のひたすらな願いを読み取り得る個所があるのである。「嗚呼此の不可思議なる『神の世界』に、吾は『人の世』のみ見て苦しむ。神よ、神よ、神よ」（六月三日）「神よあなたに由りて強く、正しく、清からしめ給へ」（七月四日）

「自然の児たらしめ給へ。区々の事に思ひ煩ふことなからしめ給へ。」(七月六日)

「神よ、吾にインスピレーションを給へ。」(七月一〇日)

「吾がシンセリティを復活発達せしめ給へ。自由独立の生活を与へ給へ。」(七月一日)

などと、独歩らしい祈りの言葉を拾い出してくるとき、『国民之友』編集時の、猛烈な多忙さ、編集に際しての対人関係の煩雑さなどからくる自己喪失感、汚濁感を看取できるのである(そのような苦痛を、一層、募り煽つたものに、両親の争いらしいものもあつたであろうことは、その祈りの言葉に、うかがいどころができる<sup>(12)</sup>)。

要するに『国民之友』編集人時代、蘇峰との関係においても、民友社員としても、最大の緊張を経験したことが推測されるのである。それでは、その原因は、奈辺にあつたのであろうか。

『新潮』『中央公論』『新小説』の、それぞれの独歩の追悼号(明治四一・七・一五、明治四一・八・一、明治四一・八・二)に見える蘇峰の回顧記事は、その手がかりを与えてくれる。『新潮』と『中央公論』との蘇峰文は、全く同一文であるが、『新小説』のものは、談話筆記のせい<sup>(13)</sup>か、実感がいきいきと伝<sup>(13)</sup>つてきて面白<sup>(13)</sup>い。

「其後(佐々城家に招待された後の事——辻橋注) 国木田君の様子ががらりと変つて、民友社の編集も校正も手につかない、非常に間違ふ。宛然<sup>まろ</sup>人が二人になつた様で以前の国木田君の仕事とは受取れない、其処で私も什麼も変だと注意して訊てみると、切りに三田(佐々城家のあるところ——辻橋注)へ往来して居るとの事にさてはと驚いたが」(『新潮』『中央公論』)

「凱旋後は国民之友の編集をやつて貰つて居た間、常によく職務を全うしてくれましたが、その中に恋愛問題といふ事があるが、私のやうな木強漢にはそれを知る事が出来ない、唯国木田君は近頃何うかして居るやうだ、校正などにも大分違ひがあるが、何うしたものだらう位にしか考へなかつたのです、所が一方は段々問題が進<sup>すす</sup>捗で結婚といふ所まで来て居るのだと聞いて、合点のいつた事がありました。」(『新小説』)

以上をまとめてみると、(1)『国民之友』編集は、最初、疎漏がなく、職務に忠実であった、(2)恋愛の進行に伴って、編集が粗雑になり、校正のミスは甚しいものがあつた、というのである。独歩の『国民之友』編集は、一八九五年（明治二八年）四月一六日から始まっているが、彼が、佐々城本支、豊寿夫妻の従軍記者招待晩餐会に列席したのは、六月九日の夜のことである。すなわち、二五一（四月三日）、二五二（六月五日）号の二冊の編集を完了したあと、二五三（六月三日）号の編集集中、佐々城信子との出会いをもつたことになるのである。したがって、二五三号以降の編集には、信子との恋愛事件が平行していた訳である。ここで、先に掲げた、独歩の、蘇峰との緊迫記事——特に六月一〇日の「吾に非常の侮辱を加へたる」こと——と照応してみると、「欺かざるの記」六月一〇日の項の、二週間分の記事が列挙してあるなかに、『国民之友』二五二、二五三号を編集したという記事と、蘇峰に侮辱を加えられたという記事とが続き、一項目において佐々城家招待記事があるのである。とすると、編集、あるいは校正のミスは、恋愛の進行に伴って、増加続発したのであるから、この時迄における蘇峰との対立——独歩のいう、彼への蘇峰の侮辱——は、『国民之友』編集事務についてではない。そこで、それは、前述した祈禱の言葉にうかがわれる、対人関係からくる自己喪失感、汚濁感に基づくものと考えらるべきであろう。すなわち蘇峰の社長兼主筆としての、換言すれば使用者としての指示、注意——世俗的姿勢の強要などをふくむ——への不満反撥などではなかつたかと推測されるのである。しかし、七月二九日の「徳富をして其の傲慢を吾の前にふるはしめよ」にいたっては、明らかに、編集、校正のミスへの叱責に対する反応であることは疑いない。とするならば、対蘇峰との緊張関係は「時事」欄の政治姿勢における、蘇峰路線への協調を強請されたといった風の屈辱感、悲憤の激情などではなかつたことが判明してくるのである。

五、

蘇峰とのトラブルは、今に始まつたことではなかつた。といつても、蘇峰との間柄が、終始面白くなかつたというのではない。実は、蘇峰は、植村正久とともに、独歩の終生の師であつたのである。それだけに、蘇峰に対して注文と批判とが膨

脹していったのは無理からぬことであつた。蘇峰の側からも、同じことであつた。以下、それまでの蘇峰との関係について、略述することで、政治路線における蘇峰同調の必然性にふれておきたい。

独歩が、蘇峰との最初の出会いは、一八九一年（明治二十四年）一月二八日、青年文学会の席上である。熊本県人で、東京専門学校（早稲田大学の前身）時代の友人、水谷真熊の紹介であつた。その後、蘇峰の私宅を幾度か訪れて交情を深めていることは日記の示すところである。<sup>(16)</sup> やがて、独歩は学校を中退して、両親の居住していた山口県熊毛郡麻郷村に引揚げたが、蘇峰はそこへ、国民叢書第一冊に当る『進歩平退歩乎』を送っているのである。<sup>(16)</sup> 売出し中の、二九歳（数え年）の気鋭のジャーナリストが、都落ちした無名の一青年に、著書を贈呈するという行爲は、前途への囑望なくしてあり得ないことである。しかも、蘇峰に、幾度も、就職の依頼をする程、独歩の蘇峰への、傾倒というより依憑の態度は深くなっている。『青年文学』二二号に、「民友記者徳富猪一郎」という論文を書いたのもこの頃だが、『青年文学』二二号の発行年月は、明治三十五年一〇月一五日、視座を蘇峰と不即不離な地点に設定した、卓抜な徳富論といえよう。要点を摘記すると、蘇峰は、(1)勤儉主義者で実行の人である、(2)民友記者としての本領は、平民主義を提唱したところにある、その点、精神的革新の伝道者である、(3)予言者、説教者、教師ではない、それは、現象の背後にある神秘的な深淵を説かず、教えないからだというのである。さらに、それに関連して、(4)平民主義とは、その根底に「キリスト教的道念の活火」が流れていた、(5)蘇峰の得意とするところは直観的な人物論である、ただし実証性を欠いている点が惜しまれる、(6)蘇峰の文章の世人に歓迎される要因は、思想にもあるが、他に「一種無類の文格」にある、というのであつた。若冠二二歳（数え年）の青年の人物論として、今日で蘇峰研究資料としての高い価値を失っていない。しかも、それは客観的姿勢を失わないまま、独歩の蘇峰敬慕のころも、十分に読みとり得るのである。

一八九三年（明治二十六年）二月四日以降は、「欺かざるの記」に記されているところだが、その二月一九日の項に、

「吾今にして始めて蘇峰兄が『少数者の責任』<sup>(17)</sup>中に革新家の資格の一として「忍耐」を加へたるをさとれり、蘇峰は理想の人なり、而も實際の人なり、吾も亦理想の人なり、而して始めて實際に入り、少しく實際を知りたり、茲に於て始めて忍耐の必要なを知り、革新の事業は時を以て收穫すべきを知りたり」とあるのである。ここには、蘇峰が、(1)理想主義者にして、かつ、(2)現実主義であると規定されているのだ。この記事と、三月三〇日の項の、「氏は実に吾の偶像の如し」という記事とを読み合わせてみると、蘇峰を、自らの理想的人間像としている独歩の心情をもうかがい知ることができるといえる。ここで注目されることは、蘇峰の「實際」の面、すなわち、現実処理の面について、特に蘇峰に学ぼうという独歩の態度を見出し得ることである。さらに、八月二十九日の項に至ると、その蘇峰観は、一層興味深く展開している。すなわち、独歩は、蘇峰を、第二の新島襄ではなく、第二の福沢諭吉である、というよりも、新島と福沢との中間的人物であるとす。かつ、「時計の如く綿密な経綸家」、「商估の如くぬげめのなき打算家」で、加うるに、その「経綸」「打算」を実行する忍耐力が、彼をして今日あらしめたというのである。そこから、蘇峰を、(1)着実な現実主義者、(2)清潔率直な知性人という評価を下しているのである。ここには、さきあげた理想主義者という規定は脱落して、明晰なりアリストという面のみ強調されており、独歩の、蘇峰心酔の方向が一層鮮明になっているということができよう。その後、独歩が、蘇峰の紹介、矢野龍溪の推薦で、佐伯の鶴谷学館の教師になつてからも、蘇峰は、新刊の『吉田松陰』を、独歩に贈っている（欺かざるの記明治二十七年一月一日）ことらみて、蘇峰の独歩評価にも、変化のないことが看取される。そうした好意に、教師に厭気のさした独歩は、佐伯から、印刷業開業資金として五〇〇円の借金を申込み、断られてゐる。断りの際の書簡に、蘇峰は

「貴兄とは面交ニアラズ心交也」

という言葉を記している<sup>(18)</sup>。このことは、二人の間は、単なる顔見知りというものではなくて、肝胆相照らす仲であるという

のであろう。少しオーバーな表現とは思うが、蘇峰の人間操縦の巧妙さを偲ばせるとともに、お世辞にとどまらない信頼の情を察知できるのである。

といつても、蘇峰は、独歩の弱点に盲目であつた訳ではない。独歩の友人、丁吉治に対して、蘇峰が独歩のエゴイズムの傾向を指摘したことを聞いて、独歩は、激憤している。<sup>19)</sup>といつても、独歩は、それをそのまま、蘇峰否定にまでは延長してないようである。それは、四月二〇日の蘇峰訪問の際、二人は「高談雄論」したとあるので推察される。さらに「欺かざるの記」九月二〇日の項に、佐伯行を前にして、蘇峰は、独歩に、「他人の衝突する勿れ、人を凌ぐ勿れ」と警めている。それを、独歩は、「今度大分に行きて人と交はるに当りて適切な誠なり。吾能く人と衝突すればなり。凌げばなり。」と、素直に認め受け容れているのである。

要するに、独歩にとつて、蘇峰は、現実社会の把握処理に就いては、良き師であつたのである。そして、師の蘇峰は、人物論の大家という独歩の評価通りに、独歩のともすれば激発する対人関係を危惧していたのである。果せる哉、民友社入社後の独歩は、その対人関係から、蘇峰の注意勧告を受けることになり、それが、蘇峰との緊張関係を呼んだのであろうと思われる。要するに、独歩の蘇峰政治路線協調も、彼の蘇峰傾倒の側面から、必然のコースであつたといえるのではなからかと思ふのである。

## 六、

さきに、独歩編集の『国民之友』一二冊の「時事」欄を分類検討した際、国際的問題の記事が抜群に多いこと、そしてそれらが国家主義的な観点から、換言すれば愛国者独歩の意識によつて規制表現されていることを指摘した。また、蘇峰の姿勢変化に副うて、藩閥政権批判の鋒先をにぶらせたこと、さらには、藩閥内の派閥争いにまでもなみなならぬ関心をよせ、そこに批判の目標を見出していること——それも蘇峰の意向通りの——をも摘出しておいた。

しかし、前者が、単に『国民之友』の従来の軌道に乗っただけのものといえないように、後者も、社長兼主筆蘇峰の希望に迎合しただけのものといえないのはいうまでもない。すなわち、この何れの事実も、独歩自身の意志と判断による、自発的な取材、選択に、基づいているということなのである。それを裏付けるものとして、次のようなものがある。それは、民友社員一同の、信仰、主義、嗜好などを、それぞれが、みずから一筆書きした社内記録たる「金蘭簿」というもののである。それに、独歩は、このように書いている。

「信仰 未定」「得意 海軍談」「希望 支那帝王」

これは、独歩のみならず、他の人びとも、冗談で書きとぼしていることはたしかである。しかし、冗談というものが、全く根も葉もない空無から飛び出てくるものでないことも、つまり、真実の片鱗をちりばめていることも、万人の認めることである。すなわち、これと、

「痛快々々！吾実は大日本帝国のために万歳を三呼せざんばあらず。支那四百余州のために一片の弔辞なくんばあらず。」などという「愛弟通信」の表現と、ひびき合うものがあることを否定できまいと思う。そこで、「愛弟通信」の記事が、なる新聞記者という職業意識のみによるものではなかったということ、すなわち、日清戦争を肯定する基本的姿勢あつてのものであつたということ、侵略を侵略と自覚しないナショナリズムというものがあつてのことということができるところではないかと思う。明治青年の一般たる政治熱、衆人のみとめる政治への情熱抱負が、彼の精神構造の基軸として存在していたことになるのである。愛国意識↓戦勝切願から、戦時中の——のみならず、一般的な藩閥政權是認へ直通する理論は、蘇峰の論理であつた。独歩の場合、その国家主義的傾向と、「時事」欄にみられるような藩閥容認とを結びつける思考はない。藩閥と国家との、腐れ縁的結びつきを指摘した言葉はある。

「今や薩長は閥を以て腐り、自由党は閥を以て腐り改進黨は閥を以て腐り、日本政界は日に益々腐朽に進みつつあるな

り。而して彼等自からは、大に気取り居るなり。預言者出でよ、革命来れ、閥は吾国の弊習か將た社会其物の特色か。<sup>(20)</sup>」

これ——藩閥容認——については、幼少年時代からの彼のなかの功名心に、その淵源を見出すより他はないのではないかと思う。独歩自身、早くから、みずからの内部に、その実在を確認できた故に、「アンビション」(野望論) (『女学雑誌』明治二年二月一四日号)と題する論文を書いて、それを排撃していたのではないかと推測される。同時に、それは明治という新時代——封建的階層性の打破されたあとの立身出世主義が、まだ生き生きと人びとの心をとらえていた明治二〇年代の、一青年への反映のすがたでもあった。そして、前田重氏のいわれたごとく、藩閥にも、学閥にもめぐまれない独歩の場合、功名心は、地下水のように生き流れ続けねばならない運命にあった。「欺かざるの記」に幾度となく繰返されている功名心の否定は、逆に功名心の実在生動と物語っている。その実態を、独歩は、はしなくも、「欺かざるの記」の中で告白してしまっているのである。

「われは功名を愛し、功名を愛せざることをも愛す」(明治二九年九月七日)  
とあるのがそれであり、また、

「政治的虚栄はわが懷疑の念を奇貨として吾を誘惑する也」(明治二九年二月一七日)とあるのもそれであった。そのような心情が、藩閥政治家や、権力階級への楽天的な、好意的な評価となっていたのであろうと思う。すなわち、『国民之友』を編集し、『時事』欄を掌握したことなどによって、政治家の駈引、その裏面の動態などをふくめた政治の生態をかいまみる機会をもったことが、功名心露出に、あずかって力があつたといえるのではなからうかということなのである。編集者としての政治との密着経験は、独歩に政治場における閥の力、必要度を認定せしめ、「時事」欄にうかがわれるような、蘇峰路線同調の観ある藩閥是認となったのではないかということなのである。中村光夫氏が、独歩文学について、「思想の健全性」をいい、「独歩を『頭の冷やかな』俗情の強い男ではなかったか」といっておられるのは、<sup>(21)</sup>前述したような編集長独歩



の態度と、つながるものがあるように考えられるがどうであろうか。

要するに、蘇峰路線類似の姿勢も、(1)青年たちを一度は捕えた政治の時代に、独歩の青春があり、人間形成を推進したことで、そして、(2)その時代は、また立身出世という身分の上昇が、薔薇色の可能性に包まれていたということ、(3)それらが原体験として、独歩の精神構造の半面を築造し、やがて、(4)『国民之友』編集の責任を負い、社長兼主筆蘇峰の指導のもと、「時事」欄に、時事を論評していく過程で、自覚的に政治意識として、整理され、形造られていったもの、といえるのではないかと思う。すなわち、独歩の『国民之友』編集は、結果的に蘇峰から政治教育を施されたことになり、独歩は、それを、その時点で懷疑なく受取っていたのであった。「欺かざるの記」の次の一節は、そのことを証明するものといえるのではないだろうかと思う。

「国民新聞社が、吾が国の政治界に対して正しき目的を有する限りは、われは此の社のために粉身するを辞せず。否、粉骨碎身するを以て楽しむ目的となす也。」（明治三〇年一月七日）

猪野論文冒頭の、独歩宛幸徳秋水書簡中に見える、独歩の伊藤博文に対する同情的表現は、以上のような、民友社時代に育成された、独歩のもう一面の政治意識に基づいていたと考えていいのではないかと考える。

「一番町教会を中心となす宗教。」「家と野とにおける文学。」という、民友社における、残り二つの目標と、さらに、その相互の関係とは、次号に譲ることにしたい。

(1) 『国木田独歩全集』第五卷、（学習研究社刊）五七〇―五七三ページ。

(2) 『明治の作家』（岩波書店刊）、一九四―一九六ページ。塩田庄兵衛編『幸徳秋水の日記と書簡』から、秋水の独歩宛書簡を引用し、説明がつけられている。

(3) 「欺かざるの記」明治二八年四月一三日『全集』（以下、この略称による）第七卷、（学研刊）二八四ページ。

- (4) 『國民之友』二九一号、(明治二八年四月二三日)に、その判決書が掲載されている。
- (5) 『青年文学』目次・本会記事他『全集』一〇卷(学研刊)五五五―五六八ページ。中村楽天「民友社時代の独歩氏」『全集』一〇卷(学研刊)一七二、一七二ページ。
- (6) 追悼特集号『新声』明治四一年七月、山崎林太郎「編集長としての国木田君」『新潮』明治四一年七月、矢野竜溪「余と国木田独歩」三島霜川「民声新報時代の独歩氏」小杉未醒「近事画報社時代の独歩氏」満谷国四郎「独歩社時代の独歩氏」『趣味』明治四一年八月、原田秋浦「民声新報時代の独歩」坂本易徳「近事画報社時代の独歩」小杉未醒・吉江孤雁「独歩社時代」『中央公論』矢野竜溪「近事画報社時代の独歩」以上、すべて『全集』一〇卷(学研刊)。
- (7) 「民声新報時代の独歩」『趣味』明治四一年八月。
- (8) 「國民之友」『文学』昭和三〇年一月。
- (9) 明治二八年四月二九日「露国干渉は愈々事実となりぬ。人心之れがために激昂せるが如し、国家の前途愈々多事ならんとはする也」五月一日「露国との形勢迫まれるが如し、若し破裂して一大決戦を惹起し来らんか、実に世界史上の一大変動たらざるばあらず」五月一日「昨日愈々遼東半島返還の詔勅出でたり。是れ吾国外交史の大失敗なり。欧洲諸国が東洋に關涉するの端是れより発せん。露国が日本を侮るも亦たこれよりせん。日本澎帳史もしばらくは中止なるべし。嗚呼世界國民の歴史は如何なりゆく可きか。七月三日「曰く、朝鮮問題、曰く魯西亜の東方運動、曰く英國の外交。何となく意味ありげなり。されど、一個、人間の主我的、自利的の作用のみ。」
- (10) 『蘇峰自伝』(中央公論社刊)二二四ページ。
- (11) 『蘇峰自伝』(中央公論社刊)三三一ページ。
- (12) 「欺かざるの記」明治二八年七月四日「多くの暗き靈を憐れみ給へ。吾母の靈の暗きを照らし給へ。父を救ひ給へ。」明治二八年七月六日「父母の靈の暗きを救ひ給へ。」
- (13) 『新潮』「余と国木田独歩」『中央公論』「民友社時代の独歩」『新小説』「最後の忠告」
- (14) 「明治二四年日記」一月一八日の項『全集』五卷(学研刊)一六四ページ。
- (15) 稲垣達郎氏の「独歩と青年文学会」(筑摩版現代日本文学全集『国木田独歩集』月報五〇号)は、これについて示唆するところが多い。
- (16) 「明治二四年日記」『全集』五卷(学研刊)二〇二ページ。

- (17) 『国民之友』一五三号、明治二五年五月三日号。
- (18) 「欺かざるの記」明治二七年四月一〇日『全集』七卷（学研刊）三三ページ。
- (19) 「欺かざるの記」明治二六年四月七日『全集』六卷（学研刊）九一ページ。
- (20) 「欺かざるの記」明治二六年四月一四日『全集』六卷（学研刊）一〇〇ページ。
- (21) 「俗人独歩」講談社版現代日本文学全集『国木田独歩集』月報一八。

（引用した独歩原文はすべて学研版による）